

コニファー類のコンテナ栽培で植木産地の活性化

マツカサのように木化した鱗片葉が集まって球形や楕円体となった果実を球果と言うが、この球果をつける植物を球果植物あるいはコニファーという。そのほとんどが針葉樹であることから、コニファーは針葉樹の総称ともなっている。これらには欧米で改良され、矮性、枝垂れ性、ほふく性、黄金葉、銀葉のものが多くあり、最近の建築様式の欧米化に伴い利用場所が増加している。

1 コニファー類の導入の経過

宝塚地域へのコニファー類の導入は昭和50年頃にスカイロケットやハイビヤクシン類などを中心に始まった。ハイビヤクシン類の中には定着したものもあったが、スカイロケットなど高性のコニファー類は栽植後の管理が不十分で生育不良や病害虫の発生が多く、普及しなかった。しかし、その後も管内の先駆的な業者や農家は、欧米から新品種の導入と試作を繰り返していた。

平成に入り、①ゴールドクレストの若草色が美しく、観葉植物として扱われるようになった。②コニファー類が出すフィトンチッドが体に良い（疲労回復、情緒安定等）③イングリッシュガーデンと共にコニファーガーデン等の人気が高まった、等により、在来の植木類には少ない青色が美しいブルーヘブンやブルーエンジェル、ブルーアイスなどの需要が増加し、今、第2のコニファーブームとなっている。

2 コンテナ生産研究会の結成

これらの情勢と併せ、周年出荷が可能な生産流通に対応できる栽培体系を確立するため、平成7年7月に兵庫県植木生産協議会の会員に呼びかけ、25名で「コンテナ栽培研究会」を発足した。この研究会は1～2カ月に1回程度の研究会を重ね、単なる机

上の学習や情報交換だけでなく、全員でコンテナ生産に取り組む実践集団として活動を始めた。平成11年1月現在、会員は33名に増え、栽培技術の研究、新品種・資材の導入、植木まつりなど即売会への対応等自主的な活動ができる集団になり、意欲的に活動している。ちなみに平成11年の生産目標は5万ポットを目指している。

3 栽培の施設化で本格化

コニファー類を中心としたコンテナ栽培の規模拡大を具体化するため、平成10年には「ひょうごの花き生産・流通近代化事業」を活用し、5戸の農家がミスト、ベンチ、棚下暖房等育苗の施設化を進めた。これにより、コニファー類の挿木の発根率向上、栽培期間の短縮などが実現できた。また、農業改良資金や自己資金で自動灌水施設の導入を進め、コンテナ栽培を本格化する農家が現れ、新しい植木産地としての動きが芽生えている。

山崎 広治（宝塚普及センター）



ゴールドドライダーの栽培状況

ひょうごの農業技術 No. 102

平成11年3月1日（隔月刊）

1部 250円（申込先・県立中央農業技術センター）

兵庫県立中央農業技術センター（0790）47-1117
兵庫県立北部農業技術センター（0796）74-1230
兵庫県立淡路農業技術センター（0799）42-4880